

はしがき

本書は『バーナード先生のネイティブ発想・英熟語』（プレイス刊）の各章に多少の改編を施し、新たな2つの章（第12章と第13章）を加えたものであり、「動詞」と「ごくありふれた小さな語」である「前置詞/副詞」からできている「句動詞」（たとえば、look up a word）について書かれたものです。みなさんの多くはおそらく、このような動詞と前置詞/副詞が形作る句動詞を「イディオム」（熟語）としてかなりの数を覚えてきたのではないのでしょうか。

これらは「イディオム」とは区別して「句動詞」と呼ばれるべきものです。しかし実際、「句動詞」という語には何か近寄りたがたい、専門的な響きがありますし、英語を学ぶときに用語についてはそれほど深く考えないでしょう。こういった事情を考慮し、前著のタイトルではあえて「句動詞」ということばを用いませんでした。改訂に先立ち、本来の趣旨に立ち返ることになりました。

そうはいつても、読者にみなさんにとってはやはり句動詞という語はなじみが薄いかもしれません。その意味において本書は英語のイディオム表現の中のあるグループについて書かれたものとしていただいてもかまわないと思います。

本書において、私は**日本人の学習者が遭遇する句動詞の問題点**について取り上げ、話を進めてゆきます。たとえば、次のような問題点です：

get up, get up to, get down, get down with, get through, get across, get into などにおける get の意味の違いを、また、こうした句動詞自体が表す実に多くの意味の違いをどのように覚えたらよいか。

あるいは、句動詞のさまざまなパターン（たとえば、pick up a

pen, pick a pen up, pick it up のパターンは可能だが、pick up it は不可）をどのように覚え、使ったらいいのか、といった問題もあります。

私は本書で、こうした問題点について話を展開し、これまでにない新しいやり方で解決する方法を明らかにしています。寡聞ながら、こうした方法を日本を含めたどの国においても、これまで目にしたことは一度もありません。

さまざまな新しい方法でアプローチすることにより、とかく難しいとされてきた英文法について、みなさんの理解が増すばかりではなく、**英語をもっと簡単にしかも自信をもって使うことができるようになる**と、私は断言します。

本書で長短さまざまなリストが収められています。その多くは、みなさんが今まで本書以外では目にしたことがないものだと思います。

これらのリストは、学習者が句動詞をマスターできるようにという観点から、時間をかけて練られ、配列されたうえで作成されています。最初はなじみがないものに思えるかもしれませんが、じっくり学んでいただければ、必ずや読者のみなさんが英語を覚え、使ううえで貴重な財産となるでしょう。読者のみなさんが本書を楽しく読み、また本書から楽しく学んでいただければ幸いです。

最後に、本書の刊行に際して翻訳の労をとっていただいた勝見務氏に感謝したいと思います。しかしながら、本書の内容に関するすべての責任は私にあります。

2013年11月

クリストファ・バーナード